

ポンちゃん  
かまちよじろう



リニューアルオープン!  
1/22(木)  
1F カフェ・ド・ミゼ先行オープン  
1/31(土)まで、オープン記念セール実施

"かがやき"のリニューアル  
外装ガラス入替  
内装カーペット張替  
新規・リニューアル等

富山国際会議場 TEL(076)424-5931

寺田工場に輪軸機を搬入付ける工事に先立ち、地元の住民や兒童らが参列して行われた地鎮祭。中央後方の建物が新川村寺田役場旧庁舎=1945年



## 焦土の中社員集まる



富山大空襲でがれきと化した富山市中心街。  
中央に見えるのが旧富山大和=1945年8月

の安否が分からぬ  
い。  
窮屈に縮った新聞制作の現場に、  
社員が集まってきた。

未明の住宅街。路上に落ちた焼夷弾から火が上がった。長瀬ら7、8人が駆け寄り消し止めた。安堵して振り返ると、街は既に真っ赤に燃え上がりっていた。「もう駄目だ」。パケツの水を頭からかぶり、近くの神通川へ逃げ込んだ。燃えるものはない川の中で、B

富山大空襲があった時は、市中心部の住宅街に住んでいた。長瀬にとっての8月2日は、自宅そばに落ちた1発の焼夷弾から始まる。「近所の人と慌てて水をかけてね」。遠い記憶をたどり寄せた。

北日本新聞社にて  
未明の住宅街。路上に落ちた焼夷弾から火が上がった。長瀬ら7、8人が駆け寄り消し止めた。安堵して振り返ると、街は既に真っ赤に燃え上がりっていた。「もう駄目だ」。パケツの水を頭からかぶり、近くの神通川へ逃げ込んだ。燃えるものはない川の中で、B

北日本新聞社の昨年末の世論調査で、県民の4割以上が戦争や昭和の歴史を「知らない」と答えた。

70年。忘れていくあの日々を後世に伝えるのは新聞の使命でもある。戦前から戦中、復興に至るまで、富山はどんな空気を包まっていたのだろう。記憶を掘り起こしづらいでいく取り組みを、まずは新聞制作の現場から始めた。

# 大空襲急ぎよ稼働

プロローグ・戦災無休刊①

疎開工場

瓦葺きの古びた木造の建物の前に、廻草をした少年が立っていた。轟音が響いてくる。少年には聞き覚えがあった。意を決し、中へ入った。1945(昭和20)年の夏、うだるよう暮い午後のことだった。少年は長瀬晃、18歳。前年に日本新聞社に入り、原稿に合わせて鉛の活字を並べる「文運」の仕事を携っていた。建物は、新聞社が新川村寺田役場の旧庁舎(現立山町寺田)を譲り受けた改築した臨時の印刷工場。長瀬の耳に届いたのは輪軸機の音だった。

この年の春から米軍による

轟炸が激しくなった。轟炸機が轟鳴する。轟音を重ねる。日本新聞社は、新聞業界では毎日、紙面を発行しなければならない。3月には、疎開工場を造ると決め、6月29日から社員が交代で作業を始めた。予備に持っていた輪軸機の移設が終わったのは8月1日夕方。その夜に、恐れていた想定が現実となつた。

2日午前0時15分ころ、空襲警報が鳴った。富山大空襲。焼夷弾によつて富山市街は焼き尽くされ、2日付朝刊の印刷を終えた直後だった新聞社も焼けた。3日付朝刊からは寺田工場で作ることになった。輪軸機は試運転さえしてない。何よりそれを動かす社員

た2日か、その次の3日だったから。70年前から、忘れたことも多いよ。85歳になつた長瀬は、柔和な笑みを浮かべ、迎えてくれた。製作畠を歩み1989年に退社。現在は富山市婦中町の新興住宅地の一戸建てに暮らす。

「寺田へ行かなければ」本社が空襲に遭つた時は寺田工場に来るよう言われ、新聞社の腕章を渡されていた。街は見渡す限りの焼け野原だ。本社の状況を確認に行く。上司は毎日のように日中の仕事を終えた後、トラックで機材を寺田に持ち込んでいた。若かった長瀬は、一度も工場に足を運んだことがなかつた。がれきの山となつた街で、寺田へ行った。がれきの山となつた街で、寺田へ行った。がれきの山となつた街で、寺田へ行った。

とやま戦後70年

富山大空襲 太平洋戦争末期の1945(昭和20)年8月2日、午前0時15分ごろに米軍のB29が飛来。焼夷弾などを投下し、富山市の街を焼き尽くした。市などによると、市内の1377棟、2万4914戸帯が被災。2719人が死亡し、7900人が負傷した。

空襲が終わり夜が明けると、惨状が目に飛び込んできた。焼夷弾の直撃を受け木に寄りかかったまま動かない人、折り重なるように川に沈む兵士たち。街にはあまりにも多くの死があふれていた。自家は燃えてしまつたが、離れになつて逃げた家族全員と無事再会できた。それで少しだけ心に余裕が生まれたのかもしれない。長瀬は仕事のことを思った。

「寺田に行つたのは空襲があつた日から4度訪ねた。寺田に行つた。

た2日か、その次の3日だったから。70年前から、忘れたことも多いよ。

「寺田へ行かなければ」本社が空襲に遭つた時は寺田工場に来るよう言われ、新聞社の腕章を渡されていた。街は見渡す限りの焼け野原だ。本社の状況を確認に行く。上司は毎日のように日中の仕事を終えた後、トラックで機材を寺田に持ち込んでいた。若かった長瀬は、一度も工場に足を運んだことがなかつた。がれきの山となつた街で、寺田へ行った。